
恋をするなら

碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋をするなら

【Zコード】

Z6636U

【作者名】

碧

【あらすじ】

幼馴染みに出てきた友人、はやてが主人公。ある日、転校生に突然好きだと言われたその日から彼女の日常は変わっていく。

『自分に誇れる己』である』

死んだ祖父は口癖のように孫である自分にそつ、言い聞かせていた。

剣術道場の師範であつた祖父は生まれてくる時代を間違えたかのような武士のような信念を持つ人物であつた。

そんな祖父に自分 林疾風は心のあり方と大切なものを護る為の力の使い方を教わった。

『自分に誇れる己』である』

祖父の口癖はそのまま自分の信念となつた。

そして自分は十八歳になり、高校三年へ進学することができた。祖父を真似た口調や女性の平均身長より高い身長、そしてなにより双子の兄と間違えてつけられた「疾風」という名前が自分を構成する大きな特徴である。

だから、ガラの良くない男数人に絡まれている女人を助けに入つた時に体操服姿の自分を男達が「兄ちゃん」と呼ぶのは仕方がないことなのであるう。多分。

「嫌がっている女人を数人かかりで車に連れ込もうとするとは男の風上にも置けない。誠心誠意彼女に謝罪をした上で即刻この場から立ち去れ」

女人を背に庇いながら自分は男たちに順に視線を走らせる。制服は着ていないと年はどうみても自分と同じ高校生かせいぜい大学生ぐらいに見えた。

しかし、田が濁つてゐる。

にやにやと人を小馬鹿にした笑いと見下したような視線が言葉にされずとも雄弁の男たちの性根を自分に伝えてくれる。

「へええええ・・・兄ちゃん。正義のヒーロー気取り?」

「あやははははははーー馬鹿でーーいつ! 時代遅れな喋り方してるのはーー!」

「怪我したくなかった有り金とその女置いてやつせと失せな

馬鹿にしたよつなことしか言わない男達に言葉は通じないと判断した自分は早々にケリをつけることにした。

・・・・決して祖父の口調を馬鹿にされて怒つたとかではないことを念のため、言つておく。

「言いたいことはそれだけか?」

静かに言つ自分に男達一瞬顔を見合す。自分の意図がよく読み取れていないらしい。

全員の視線が自分から外れた一瞬を利用して自分は腰を低く落とし行動を開始する。足が地面を蹴つた。

「なつー!」

男たちがこちらの動きに気付いたときには自分はもう粗手の懷に入り込んでいた。

「はああー!」

かけ声と共に男の腹に小掌を叩き込む。祖父直伝の技で相手の行動を封じることを目的としているためそう威力は強くない。

だが、受身もろくに知らない素人に使うのなら手加減しても多少の痛い目ぐらいは見せられる。

剣術を主としていた祖父だが剣がない場合の戦う方法も教えこんでくれていた。これはその一つ。

ものの数秒で男たちを行動不能にした自分はしきりにお礼を言つて引き止めてくる女人に（どういう訳か頬が紅潮し、目が潤んでいる）気をつけるように厳重に注意し、人通りの多い道まで送ると途切れていたマラソンに戻った。

剣道部の体力つくりの途中で先ほどの騒動に出くわしたからな・・・皆、もう学校に戻っている頃だろう。

自分も早く帰なればな。

そう思いながら再び走り出した自分を観察している人間がいたなど欠片も気付かなかつた。

次の日。

剣道部の朝の鍛錬を終えた自分は己のクラスに向かう途中で見知った顔を見つけた。

「雨沢？」

声を掛けると黒い髪を肩口で切りそろえた自分の親友、雨沢秋が振り向き挨拶してくる。

「あ、はやて君。おはよっ」

その隣にいた少年、雨沢の幼馴染で去年すつたもんだの末に彼女と恋仲になつた一学年下の風間勇太も振り向き、軽く会釈をしてくる。

「おはようございます。林先輩」

「おはよう。相変わらず仲が良いな」

「ええ。ラブラブですか？」

「いやか……ではなく眞面目に真剣にそつまつ幼馴染殿の頭を間髪いれず雨沢の拳が唸りを上げて叩き込まれる。その顔は真っ赤であった。

「な、な、なに言ひていのよ！あんたは……」

照れ屋で天邪鬼なところのある雨沢にしてみれば幼馴染殿が言ったようなことを言われるのはかなり厳しいのだ。

「ばかばかばか……！」と殴りかかってくる雨沢を慣れた様子で押さえこむ幼馴染殿。

これは……主導権がどちらにあるのか一目で分かる光景だな。しかし……側から見ていると恋人同士の他愛のないじやれ合い以外の何者にも見えない。

・・・自分はもしかしてお邪魔虫になつてしているのか？当然でいるのか？気を利かせて立ち去るべきか？

う～～むと考え込んでいると不意に雨沢に腕をつかまれそのまま強引に歩き出される。

「お、おい。雨沢……」

「行くよ。はやて君……」

真っ赤な顔をしたままこちらを見もしないで雨沢は細い体のゞこにそんな力があるのかと思うぐらい強い力で自分を引っ張っていく。あーーー。雨沢・・・そんな態度を取ると幼馴染殿が怒る・・・と思つたのだが意外なことに幼馴染殿は怒つてはいなかつた。

この一年ですっかり大人びてきた顔に優しい笑みを浮かべてずんずん進んでいく雨沢をみていた。

その瞳の眼差しが視線の先にいる人物のことを大切で大切でどうしようなく想つていてることを感じさせる。

驚いた自分に気付いた幼馴染殿がにやりと雨沢に向けるものとは違う不敵な笑みを見せる。

(うーーむ。どうやら自分はあの御仁を良く見すぎていたようだ)

こんなことで腹を立てたりまして自分に嫉妬したりするほど狭い器量の持ち主ではないらしい。

ズルズルと引っ張られる自分と引っ張る雨沢に向かつて幼馴染殿は小さく手を振つていた。

「雨沢」

「なによー?」

「そんな顔するぐらいなら天邪鬼、治せ」

教室に入るなり全身全靈で自分の行動を後悔して落ち込む雨沢に自分はそんな助言を「える」としかできなかつた。

「まあ・・・あの御仁はあまり気にしてはいないようだからそこまで落ち込む」とはないんじゅないか?」

「で、でも・・・やつきの態度は自分でもいけないって思つ」

すんと落ち込む雨沢。じつにもじつにも自分の感情を上手くロン
トロールできずにいるらしい親友は一日に一度はこんな風に落ち込
み、自分は彼女の愚痴を聞いてやるのがこの一年の日課になつてい
た。

ぽんぽんと頭を撫でてやるとやつと落ち着いてきたらしき雨沢が
小さく笑顔を向けてくれた。

「はやて君つて・・・理想のお父さんみたい」

かつこよくて優しくて頼りがいのある。と嬉しそうに言つ雨沢に
自分の顔が盛大に引きつる。
全然嬉しくない評価である。

「雨沢・・・何度も何度も何度も何度も言つているが自分は女なんだが?」

「あら?何度も何度も何度も言つてているけどそんなこと何も承知よ
?」

ふふつと笑う雨沢は先ほどまでの落ち込みが嘘のようだ。
基本的に恋愛事と幼馴染殿が絡まなければ口が達者で頭の回転も
速い人物なのだ。

そしてそう口の達者な方ではない自分はいつもいつも雨沢の達者
な口に黙らされる破目になるのだ。

はあ・・・と溜息をついてとき教室中に実に痛そうな音が盛大に響
いた。

自分と雨沢は無言で顔を見合す。

「・・・・椎ちゃんね」

「多須賀だな・・・」

自分たちの予想を裏つけるかのように廊下から「いたたたつ」と
いつ少女の声が聞こえてくる。

からからと開けられた扉の向こうにいたのは赤くなつた鼻を押さ
えている高校生とは思えないほど小柄で童顔な少女。
自分たちと同じ柏木高校の制服を着ており、無難作に伸ばされた
前髪のせいで顔の半分は隠れてよく見えない。

彼女は多須賀椎奈。雨沢と同じく自分の親友だ。

「うにゅーーー。鼻、ぶつけた」

「どれ、見せてみる」

「はやて君・・・」

小動物のようにつぶらな瞳が自分を見上げてくるのに苦笑しつつ
も多須賀のぶつけたといつ部分を見る。多少赤くはなつているが大
事には至っていない。

「大丈夫だ。少し赤くはなつていても傷もない」

「ほんと?」

「ああ」

頷いてやると多須賀は安心したようにぱつぱつと笑つ。まるで赤
子のように邪氣の無い笑顔を浮かべる多須賀は悩みが無いように思

えてしまつ。

そんな自分たちを雨沢がにまにまと頬杖をついて観察している。
その顔になにかよからぬものを感じた自分の田が自然と据わつてしまつのをとめられない。

「雨沢？」

「やつぱり……お父さんみたい」

自分は無言で逃げる雨沢を追いかけた。

「席に着け／＼＼＼＼

自分と雨沢がぎやーぎやーとはた迷惑な追いかけっこをしている
と担任が入ってきた。

どうやらいつの間にかHRの時間になつていたようである。
雨沢の襟首を捕まえている自分に担任が諦めの極致のよつた笑顔
を見せつける。

「林、雨沢……」「また」お前らか……

どうも自分と雨沢はこのクラスの問題児扱いされてゐるよつた節
があるよつた無いよつた……。

担任は疲労の濃い顔で溜息をつく。
すつと息を吸い込みそして

「小学生のよつた馬鹿騒ぎしてないでせつせと席に着けえ……」

怒鳴った。

それに逆らつぱり自分も兩沢も愚かではない。

以心伝心。すぐさまそれぞれの席につく自分たちに担任は酷く達観したような諦めきつたような表情で出席簿を持ち直す。

「あ～～それではHRに入る前に皆さんに新しいクラスメイトを紹介します」

担任の言葉に教室中がざわめく。

彼の言葉を信じるなら転校生がこのクラスに来るということだが・
・高校三年になつて三ヶ月過ぎようといふこの時期に転校生？
すこし、興味が湧いた自分は視線を窓の外から教壇に移す。

担任の「入ってきなさい」という言葉と共に教室の扉が開かれる。教室中から感嘆の声が漏れた。

担任が黒板に特徴的な文字で「朝倉蒼一」と書く。
静かで低く、耳に残る声が水に落とされた波紋のように教室に広がつた。

「朝倉蒼一です。どうぞよろしく」

朝倉蒼一という御仁は声の良さに見合つだけの整つた容姿に控えめな笑みを浮かべながら自己紹介をした。

第一印象は好青年。だが・・・・・。

不思議とその顔に見覚えがあるような気がして自分は一人首を捻つていた。

柔らかそうな今時珍しい黒く真つ直ぐな髪。誠実そうな柔和な表情を浮かべる顔。

身長も高い。そこいらの男子より高い自分と同じぐらいか相手の方が少し高いかもしれない。

むつーと眉間に皺を寄せ、観察していると不意に朝倉蒼一が自分

の方を見た。

視線が合う。

恐らくは数秒。周囲にはまったく不自然に思われないほどの時間だ。

だけど、その時、彼の瞳に浮んだ光は第一印象を大きく裏切っていた。

その瞳はまるで獲物を見つけた野生の猛獸のように自分には思えてならなかつた。

驚きのあまり動けない自分を小さく笑うと彼は視線を外した。

なんだ？一体この男は何者なんだ？

こつそりと視線を送つても一度と朝倉は自分を見るることはなかつた。

休憩時間になると女生徒に囲まれ質問責めにされる朝倉蒼一を自分はじつと観察していた。

ちょっと困った顔をしながらも丁寧に対応している様子はどこにでもいる・・・というには顔が良すぎるが、好青年のように見える。パクリとむすびにかぶりつきつつ思考を巡らす。

思い出すのは朝のあの瞳。

どう考へてもあの瞳を視線の先で女生徒に囲まれている青年が浮かべたとは信じ固い。

「はやて君？どうしたの？さつきから朝倉君の方を気にしているみたいだけど？」

自分の前で弁当に下つつみを打つていた多須賀がらあげを食べる手を止めて不思議そうにそう聞いてきた。

因みに雨沢は美形の転校生のうわさを聞いて血相を変えた幼馴染殿に強制的に拉致されたためこの場にはいない。

（朝は案外と器の大きな男かと思つたが・・・）

案外狭い。何がとはあえて言及しないが。

あの慌てふりを見ると買いかぶり過ぎたようだつた。

「ふむ・・・少々、気になる御仁【だと思つてな】

「気になるの?」

「ああ・・・どうした? 多須賀。変な顔をして」

多須賀は何かに弾かれたように背筋を伸ばすと次いでブンブンと首を振る。

「ううん! なんでもないよ! ! 男の子に全然興味のないそこの男の子より男前なはやて君が朝倉君に興味を持ったことが意外すぎて驚いたなんてこと全然ないよお! ! !

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・多須賀・・・・全然誤魔化せてないぞ」

心の中にどぎめでおぐべきことが全部ただ漏れの多須賀に自分は思わず食べていたむすびを喉に詰まらすかと思つた。

「多須賀が思つているような「気になる」ではない。第一自分はまだ修行中の身で色恋に現を抜かすことの出来る身分ではない

「相変わらずお侍さんみたいに厳格な生き方だね〜〜

またこの御仁も微妙に気になる表情で微妙な気分になる言葉を言ってくれる。

「厳格でなにが悪い。自分に甘い生き方をしていたら墮落していくだけだ。厳しいぐらいで丁度いい」

多須賀が呆れたように溜息をついた。

「はやて君は厳し過ぎだよ・・・」

一口お茶を啜つついで多須賀は締めくくった。

「とにかくー自分はそういう意味で「気になる」訳ではないー。」

「うん。それは分かつたけど・・・はやて君」

「なんだ?」

多須賀が横を向く。自分も釣られてその方向へと視線を向ける。
視線の先にはじからを見るいくつもの瞳。

多須賀が申し訳なさそうに小さく説明をしてくれる。

「私たちの会話、どうも筒抜けみたいだつたよ?」

朝倉蒼一もぱつぱつ自分たちを見て、自分は思わず動搖してしま
う。

本心の読めない今は一応愛想の良い瞳が自分に注がれているのが
ものすゞしく居心地が悪い。

しかもその居心地の悪さに拍車をかけるかのように教室中の視線
が自分に集まっている。

だらだらと気持ちが悪い汗が背中を流れ落ちていく。

(どう、どうするべきだ?)

答えは出ない。

まるで悪戯をして祖父に説教をされ、そのままずっと無言で向き合つ破目になつた幼い頃に感じたのと同じ居心地の悪さにじうずればいいのか分からなくなる。

誰も喋らない動かない状況で事態は硬直したままだ。

「・・・・林さんは、「そういう意味で」僕のことが気になるわけじゃないんだ」

不意に朝倉蒼一が口を開く。

柔らかい笑顔。だけどその笑顔に不吉なものを感じて自分は無意識のうちに彼から距離を取るうとしていた。

な、なんだ。ものすごく嫌な予感がする。

朝倉蒼一は本当に残念そうに溜息をつく。だけど自分には分かる。あれは演技だ。

その証拠にあいつの田は初めて田があつた時のあの田をしている！

「僕は「そういう意味で」林さんのことが気になつて仕方が無いのに・・・残念」

爽やかにそういう言い切つて肩を竦める転校生に誰一人反応を返すものはいない。

爆弾発言。

あまりの威力に自分の脳裏から日本語が一瞬綺麗に消え去つた。
い、いまのは一体どこのどこの国のことだ？

なぜだが日本語のように聞こえたがきっと異国の言葉に違いない。
きっと全然関係ない意味を持った言葉だ！！

そう言い聞かす自分の隣で多須賀が握り拳を震わせ、キラキラし

た目で朝倉蒼一を見ていた。

それを横目で確認した自分の胸に嫌な予感が生まれる。

自分が多須賀を止めるよりも早く多須賀が口を開く方が速かつた。

うああああああああ！人ヒトが折角聞きき間違まちいで済すまそうとしていたことをすばり本人ヒトこ聞きいてしまつたたく！

多須賀の直球な質問に朝倉蒼一はうつとりするような笑顔を浮かべて大きく頷いた。

「ああ。その通りだよ。僕は彼女のことが好きだよ」

「えええええええええええええつ！！」

クラス全員の声が重なった。

その声を綺麗に聞き流すと朝倉蒼一は優雅な足取りでもすびを持つたまま硬直している自分の前まで来るとこやかに自分の手を取りそのまま口に・・・・・つて！－

手、の・・甲に・・・・せ、せ、接吻された・・・・！

自分の顔が瞬間湯沸かし器のように湯気が出そうなほど真っ赤に
そまる。手を振り払い的に意外なほど強い力で？まれてそれも
敵わない。

「お、お前……一体なんのつもつ……」「

「林さん。僕と付き合いましょう」

は？

にこやかな顔でこいつは何を言っているんだ？

事態が急展開過ぎて自分も周囲もまったくと言つていいほどついていけない。そんな中、朝倉蒼一だけが涼しげな顔で事態に乗つていけている。

というか進んで事態を自分たちがついていくものに変えているのはこいつだ。

「阿呆か！…」

がんがんと特大の五寸釘を脳天に突き刺されたような気分で叫ぶ自分。

掴まれた手を無理矢理剥す。

衆人觀衆の目の前でいきなり告白してきた男が心底憎かつた。

「阿呆？ひどいな。僕は自分の気持ちに正直になって行動しただけだよ？」

ぶちりと堪忍の緒が切れた。

「貴様のような男などお断りだあああああああああ…！」

反射的に拳を繰り出す。が、鋭く風を切る自分の拳を朝倉蒼一はあっさりと避けてしまう。

「おや…・」

軽々と拳を避けられて自分の武道家として自尊心が大いに傷つけられる。

避けられた？本気の拳を何でもないかのよつに避けられた自分はムキになる。

「貴様…………つー！」

どうみても武道に縁のなさそうな素人に感情が高ぶっていた一撃とはいえ避けられて本気の本氣で悔しかつた。

「ごわつ！と背後に見えない炎が燃え盛る。

だがそんなことを知る由も無い朝倉蒼一はにこやかに自分の手を掴みそのまま引っ張る。

当然自分の身体は彼の腕の中に倒れこむ形になる。
きやー！と周りから悲鳴がいくつも上がった。

硬直してしまった自分の耳にだけ聞こえる音量で朝倉蒼一は囁く。

「俺と付き合えよ。はやて」

一人称が「僕」から「俺」に変わっている。しかもどう考へても性格のよろしくないしゃべりをしていた。

ばつと離れて彼を見ると彼は仮面のような笑顔に戻っていた。

さつきの言葉が嘘だと思えるぐらいの変わりよう。だが、自分は確かに聞いた。

「お前は…………一体…………」

「はやて君っ！」

様子の違う自分に多須賀が心配そうに自分の制服を引っ張る。だが、それに答えるほどの余裕が自分にはなくただただ目の前の男の正体を見極めるのに意識を集中していた。

自分の喉がからからに渴いた声を出す。

「お前は一体・・・何者だ？」

自分の言葉に朝倉蒼一は不可思議な笑みを見せるだけだった。

昔、まだ両親が健在で祖父に引き取られる前。自分は今の自分とは似ても似つかない外見と性格をしていた。

泣き虫で人見知りで甘つたれで怖がり。

背中まで伸ばした髪。いつもいつも俯いていた顔。

振り返ってみてもうつとうしい暗い子供だった。

双子の兄である葉月が闊達で明るい性格だったから余計に自分の性格は浮き彫りになっていた。

そんな自分が変わったのは両親が交通事故で死んでしまって兄と2人祖父に引き取られてから。

自分で背中まである髪をぱつさりと切つたときに「わたし」は「自分」になった。

強くなる。

そう決めた。

だから弱くなんてなりたくない。

「やあ、林さん。今、帰り？」

部室から出てきた自分の前には似非臭い笑顔を浮かべる少年が一部室の側の木に背中を預けながら手を挙げてきた。

自分は無言で少年 朝倉蒼一を睨むとその脇を通り過ぎようとする。そんな自分を朝倉蒼一は引き止めるとはしなかつたがきつちり声を掛けることは忘れない。

「つれないな。僕、そんなに嫌われていいる？」

困ったような悲しそうな表情に自分の後ろにいた後輩たちが一気に奴の擁護に回る。

「林先輩！！駄目ですよ。そんな態度！」

「そうですそうです。朝倉先輩にあんな顔させちゃいけません！」

「好きな人にそんな態度をとられたら誰だって悲しくなっちゃいます！」

連発して繰り出される擁護攻撃にさすがの自分もウンザリしていく。

例の告白事件から一週間。

朝倉蒼一は自分の近くに出没するようになつた。

部活の終わりを狙つて現われるのもその現象の一つだ。

その度に自分は睨むなり帰れと促したりするのが奴の顔と紳士的な態度（自分は外面だと思うのだが）にすっかり懐柔されてしまつた女子部員がこぞつてそんな自分を非難するようになつてしまい本気で自分は孤立無援の状態に陥つていた。

あ～～そろそろ来るぞ・・・。

そう思つていると案の定朝倉蒼一が申し訳なさそうに口を出してきた。

「皆さん。そんなに林さんを責めないで。僕が勝手にここにきているんです。だから・・・林さんは悪くないんだ」

そこで儘げで健氣そうな表情。どんな態度を取られても僕は気にしてないんだと思わせようとして失敗したようなその表情にその場にいた自分を除く全員の胸が高鳴る。

・・ああ・・・今日もまた逃げられない・・・。

頭を抱えて座り込みたい気分に陥る自分の肩を後輩の一人がものすごい勢いで揺さぶる。

「林先輩！！絶対絶対朝倉先輩と一緒に帰つてあげてください！」

「やうですよ……逃げちゃダメですかうね……」

鼻息も荒く自分に言い聞かす後輩たちが本気で怖い。
ぐいぐいと自分を朝倉蒼一の方へと押し出すと全員が朝倉蒼一に向かって笑顔でこう締めくくる。

「アーティストの世界~~~~~」

「いや、くじで見るかああああああ！」

大変不本意ながら自分は朝倉蒼一と2人きりで帰宅の徒についていた。

会話なんてない・・・と言いたいところだが実のところ会話はある。

「つたぐ・・・相変らず不機嫌そうな顔しかしないな。お前」

「自分たちの間に不機嫌になる以外の要素があるのか？」

素つ氣無くそう返すとなにが可笑しいのか朝倉蒼一はぐうぐうと

喉の奥で笑う。唇と片側だけ上げた皮肉めいた笑みはだけどいつも作り笑顔より数倍もこの男に似合っていた。

「くくっ・・・本当に面白いやつ。まあ、そういう所が氣に入っているんだけどな」

「・・・・だからなんでお前は自分に付きまとひ」

何度も何度もした質問に何度も返された答えがまた返された。

「理由なんて些細なことだろ。気にするな」

飄々とそういう受け流す朝倉蒼一に自分は今日もまた苦々しい気分を味合わされる。

「からかうな。冗談に付き合つほど自分は暇じゃない」

「奇遇だな。俺も冗談じやない。本気の本気でお前を口説いている」

「面白やうじそんない」とを叫ぶ。

「貴様・・・」

殴りたい。

だが、不用意な暴力での解決は祖父がもつとも忌み嫌っていたことだし自分もそのようなことは好かない。

自身もしくは他人を護るために身につけた武芸は使われるべきだ。

うつかり初対面で拳を繰り出したことは不可抗力だ。本来なら全

身全靈で謝罪すべきなのだろうが朝倉蒼一が相手だと腹が立つ」と
が多すぎて謝罪する気になれない。

「疾風? どうした?」

気に喰わないことにこの男は他人の目がないと自分を下の名で呼び捨てにしてくる。貴様とここまで親しくなった覚えはないと怒鳴つても糠に釘のように手厳しいがなくかわされてしまう。

「…………どうもしない」

だから子供のように無視するかはぶてるしか方法がないではないか。

どうにも勝手が狂う男だ。

隣で歩く男に自分はいつも調子を出せずにいる。
むかむかしながら歩く自分を朝倉蒼一が目を細め「ふーーん」と
意味ありげに見てくる。・・・なんだ?

「疾風」

「なんだ?」

ぶつきら棒にそつこつ自分に対して朝倉蒼一はにっこり笑顔。

「好きだよ」

ガンッ!!

自分は無言で電柱に顔からぶつかった。
涙が滲むぐらい痛かった。

「……………つー…こせなり何、戯言をほざいていのー…」

痛みのせいでいつもより五割増しで怒りが増幅された。

「何って俺の本心」

しつとそんなことをいつと朝倉蒼一は赤くなっているであろう
自分の額に触れ前髪を搔き分ける。

見た目よつずつと大きく逞しい手に自分の心臓が一度大きく鼓動
を打つ。

な、なんだ？鼓動が早くなっている？
心なしか頬も熱い。な、なぜ？

「ふむ・・・怪我はないな？って疾風顔、赤いぜ」

にやりと笑いながらそんなことをいつと朝倉蒼一はなんでもお見通
しだぜといわんばかりの態度で自分の頬に手をやる。
なぜ！頬に手をやる必要があーー！

「なに？動搖してんの？」

図星だ。

だが、理由が自分でもわからない。
分からぬから自分は反発する。

「動搖などしてはいないーー！」

「意地つ張りだなあ・・・」

「い、意地ではない！…眞実を言つたまでだ…！」

頬に添えられたままの手を振り払い再び歩き出す。後ろはなぜか振り向けなかつたが「照れてやんの」という声と笑い声が聞こえてきたので振り向かなくて良かつたと思つた。

振り向いたら自分は祖父に嫌われることをしてしまいそうだ。

「お～～い。疾風」

無視だ無視。

スタスタと意地になつて前を歩く自分は前方不注意だった。

「おい！」

鋭い朝倉蒼一の声。

「え？」

気付いた時には朝倉蒼一が自分の腕を力任せに？んで彼の方へと引っ張つていた。

自分の身体が勢いよく彼の身体にぶつかる。

今、まさに自分が渡ろうとしていた横断歩道を車が通り過ぎる。

「あぶねえ…」

朝倉蒼一の驚きと安堵の混じつた声が吐息と共に自分の耳のすぐ側を通る。その感覚に自分の心臓の鼓動が一瞬だけ大きく狂つて聞こえた。

「あさ・・」

「！」の馬鹿……」

耳元で大音量で怒鳴られて自分は思わず目を瞑ってしまった。なんだ？

恐ろしく怖い顔した朝倉蒼一の顔に自分は混乱していた。

「前も見ないで何やつてんだ！――」

事態をようやく把握した自分はかっと頭に血が上った。

「馬鹿とはなんだ馬鹿とは……」

「車が来ている横断歩道を渡りつつあるのは立派な馬鹿だらうが――！」

ほんほんと言ふ争う自分たちはわざ滑稽であらう。
しかも自分は朝倉蒼一に後ろから抱きとめられたままの体制なのだ。だが、本人達はいたつて真剣に舌戦を繰り広げていた。

「貴様の物言ひは高圧的なんだ！――腹が立つ――！」

「高圧的って……そんなに強く言つてねえだらうが――」

「言つてこる……」

「言つてない――！」

「言つてこる……」

「言つてないつて言つてんだらうがあーー。」

自分は自分より少しだけ高い位置にある朝倉蒼一の顔を睨みつける。彼も負けじと睨んでくる。

「貴様のように高圧的で裏表が激しくて言動の全てが一々自分の気に障る男は初めてだ！」

「俺だつてお前がここまで意固地で意地つ張りで捻くれ者でオマケに無鉄砲だとは思つてなかつたよー！」

「わやー、わやー」と返す刀で、互に争う自分のたちに、やがてのぞびつてしまふ。た声が翻つて入つてきた。

「あれ～～～？朝倉くんとはやで君だあ～～～」

一体いつの間に現れたのか多須賀がのほほんとした顔で自分たちのすぐ側に立っていた。

多須賀は自分たちを見ると微かに驚いたように目を丸くする。

「…………ねえ、どうして君を朝倉くんが抱きしめているの？」

! ?

言られて自分たちの状態に初めて気付いた。

「のあ！」

「あ、しまつた。気付かれた」

慌てて朝倉蒼一から離れる自分。そして残念そうな顔をした朝倉蒼一。先ほどの発言内容と一緒に考えるところの男、気付いていてワザと自分のことを離さなかつたな！

「な、き、あ、・・・・・・・・・・・・」

衝撃のあまり罵倒の言葉すら上手く出てきてくれない。そんな自分の背を多須賀が撫でてくれる。

「大丈夫？ はやて君お口をぱくぱくさせて顔が真っ青だよ～～？」

「つていうか息してねえ！！疾風！！吸ってばかりじゃなくて吐け！！ああああーー！ 今度は吐き続けているーー！」

ガクガクと自分の肩を揺さぶる朝倉蒼一をどこか遠くに感じていた。

「由々しき事態だ・・・・・・」

夕餉の仕度をしながら自分はチラリと居間の方を見て溜息を零す。今、我が家の中間にいるのは兄である葉月。友人である多須賀。そしてもう一人招かざる客である 朝倉蒼一が楽しげに談笑していた。

「どうして・・・・・こんな事態に・・・・・・」

考えるまでもない。自分のせいだ。呼吸混乱に落ちいつた自分を無理矢理家まで送つてきた朝倉蒼一を見た葉月がくついてきた多須賀共々夕餉に誘つたからだ。

(多須賀ならともかく朝倉蒼一の奴・・・初めて訪れた家でちやつかり夕餉をたかる気か!—)

ムカムカする。

だんだんと手元の野菜を親の敵のように切り刻む。

(腹が立つ。腹が立つ。腹が立つ！－)

玉ねぎと人参を細かく切り刻むとそれをひき肉の入ったボールに入れ軽く味付けをした後に手で混ぜ合わせる。
ただひたすらに捏ねて捏ねて捏ねまくる！

ପ୍ରକାଶନ କମିଶନ

ほどよく捏ねたひき肉を今度は手で成形していく。空気抜きも忘
れずにする。ものの数分で見事なハンバーグ（焼く前）が出来上がる。
それらを冷蔵庫に入れて寝かせる。

「よしー」これで主食の下準備終わり。次は・・・・・

スープとサラダ。

スープは玉ねぎのコンソメスープでいいとしてサラダは・・・
ジャガイモがあるか・・・ならジャガイモと人参をマヨネーズであ
えて・・・。

「へえ～。手際いいな」

「…？」

突然現れた気配に手にしたジャガイモを反射的に声の主に投げ付けてしまう自分。

あ。しました！

（食物を粗末な扱いに～～～！）

「おつと」

ぱしりと音がして投げたジャガイモは朝倉蒼一の手に収まった。

「あぶねえな・・・・それと食い物を粗末な扱いするな」

ぽんと自分の手にジャガイモを乗せながら朝倉蒼一が言つ。

「・・・す、すまな・・・・い・・・・」

自分が全面的に悪いと分かつてゐるが朝倉蒼一相手だとどうにも素直に謝罪の言葉が出てこないためどうしても途切れがちになる。それに何故か朝倉蒼一はジロジロと自分の上から下を見ている。

「Hプロン姿、結構似合ひじゃん」

「・・・・・・・・・・・・・・」

恥ずかしい。Hプロンが似合つなどと言われた事生まれてこのか

た記憶はない。

自然と顔が俯く。

「照れた？」

「煩い！！」

図星を突かれ、反射的に怒鳴る自分を朝倉蒼一は何故だか楽しそうに見ている。

・・・なぜだ？

「お前、想像以上に面白いな」

どういう意味だと聞いたかった。いや、言いかけたのだ・・・朝倉蒼一の表情を見るまでは。

その表情をどう表せばいいのか自分には分からない。ただ何かを懐かしむような愛しむような表情を彼は浮かべている。

「田が離せない」

そつと壊れ物に触れるように朝倉蒼一の手が自分の頬に触れてくる。

「一度見つけたらもう一度と田が離せない。触れたら離せなくなる。ずっと側に置きたくなる」

「あれ〜・・・

「朝倉くん。はやてくん何かあつ・・・た・・・・・・・・

? !

慌てて台所の入り口を見れば絶句している多須賀の姿。

「なつーー」、これは……」

前々から思っていたが多須賀。お前はいつも間が悪い……

「！」、「じめん！なにも……なにも見てないから~~~~~！」

怒涛の勢いで居間に取つて返す多須賀。

この状況でその言葉が信じられるかあ！

「おやおや」

「なにをのん気に感心しているんだ！貴様は！多須賀に誤解されたぞ！」

「誤解？別に誤解じゃないしょ」

何を言い出すのだこの男は！

絶句してしまつ自分がぐぐっと朝倉蒼一は腰に手をしながら顔を近づけてくる。

思わず一・二歩後ずさりしかけるがまるで奴に怯えたよつた気分になるので直前で耐え、きっと睨みつける。

そんな自分に朝倉蒼一はにやりと他の人間には決して浮かべない自分にだけ見せる笑顔で囁く。

「俺はお前が好きなんだからさ。誤解？大いに結構。むしろ……

「

「な、なんだ」

意味ありげに言葉を途切れさせると、いつんと軽い衝撃が額に走る。気が付くと頭に回された手で朝倉蒼一が額をあわせてきた。信じられないぐらい近くに他人の・・・しかも異性の顔がある。かつと頬が熱くなるのを止められなかつた。

「誤解じゃなくて本当にするけどな。俺は

朝倉蒼一の言葉は希望ですらない確定事項であった。

「なつー。」

「覚悟、決めろよ?」

にやりと笑う顔はまるで獲物を狙う肉食獣で。

絶句してしまった自分は狙われた草食動物の気分で。

そんな自分に朝倉蒼一は満足したよつににつと笑うと自分から離れる。

「うんじゃーメシができるまで未来の「義兄」さんの機嫌でもとつておくれよ

ひらひらと手を振りながら居間に向かいつばり背中を見送りながら自分はするするとその場に座り込んでしまつた。なにやら聞き捨てならないことを言われた気がするがそれに突っ込む気力は残されていない。

情けない話。腰が抜けてじばらくの間立ち上がりなかつた。

「いや～～朝倉くんつていい人だな」

ばきつ！！

双子の兄の馬鹿な発言に自分は洗っていた箸を真つ一つに折ってしまった。

「うおー。どうした疾風！」

「……………なんでもない」

朝倉蒼一も多須賀も帰り兄妹一人で夕餉の洗い物をしているときなり葉月が訳のわからないことを言い出した。

・・・・・兄よ。騙されている。騙されているぞ！

だがここで声高に朝倉蒼一の本性について語ったとしてもすっかり朝倉蒼一を気に入ってしまったらしい葉月が聞き入れるとも思えない。

だから自分は無言で皿洗いに戻る。

その隣で洗つた食器を拭きながら葉月は尚も朝倉蒼一について語る。

「礼儀正しいし、社交的だしさりげない気配りもできて男の俺からみてもいい男だよ。彼は

本性は口が悪くて腹が黒く、人の弱みはしっかりと見つけてなければ作り出すような男でもか？」

「疾風の彼氏には朝倉くんみたいな人が似合うと思つた」

「ドスッ！」

自分の手から泡の付いた包丁がすべり落ち、数ミリの差で足をさけ床に突き刺さる。その光景を見ていた葉月の顔から血の氣を一気に引いた。

「のあー疾風ー！」

隣でおろおろする葉月の言葉は完璧に自分の耳を素通りしていた。果然と今、聞いた言葉を頭の中で繰り返す。そして朝倉蒼一の言った「機嫌でもとつておく」という言葉の意味。

そ、外堀から埋めていくつもりか！あいつ！

学校でも周囲を味方につけその上たつた一人の家族までも味方につけられたら孤立無援もいい所だ。

本気でどうにかしないとこのままでは・・・・。

恐るべき未来図が思い浮かび自分はぞぞつと悪寒に肩を震わせた。

「で、私に電話してきたわけね・・・・」

呆れたような雨沢の溜息が受話器越しに自分の耳に届いた。

「あ、呆れたように言つたつむー！」つむは死活問題で一本氣で悩んでいるんだぞ！」

「はいはいはー・・・で?」

「で?・とま・・・・」

電話の向いの雨沢の呆れがさりげなく酷くなつたように感じて自分は慌てる。

「だから・・・はやて君は句を私に相談したいの?」

「それは勿論朝倉蒼一をどう撃退すべきか、だ

「撃退つて・・・あなたねえ。害獣駆除の相談じゃないんだか
ら・・・」

気分的には似たようなものだ。

「闘いだ。」のまま何もせずにいたら敵の思つ通りになる。すでに学校も家も敵の手中に落ちている。焦らないほうがおかしい

「」のままでは周囲に流れかねない。

「くつー...真正面からくれば「アホか出直せ」と撃破できるのに周囲を囲まれたらなかなか突破できん!」

「私はいま、恋愛相談されているのか戦闘のアドバイスを求めら
れているのか分からないわ

気分的にはほぼ似たようなものだ。

「雨沢!」

「はいはい……で結局はやめて君に朝倉へと付き合つらね
わいからない無いんでしょ？」

「当たり前だ！！」

「だつたら話は簡単でしようが！それこそ真正面からびつめぱり
と断ればいいだけの話でしょう？」

「…………ああー！」

ポンと思わず手を叩いてしまつ。

そうかそうだな。交際を求められたこの状況を打破するには雨沢
の提案が一番確かだ。

「もしかして……全然思いつかなかつた、とか？」

「まじまじあきれ果てたと言わんばかりに雨沢が「叶わないわ」と
ぼやいた。

だが自分はよひやく見出された光に浮かれていた。

「雨沢、感謝する！明日さつやく朝倉に断りを伝えるぞー！」

「…………お役に立てたならいにけど…………なんか嫌だな……
人の失恋に加担したみたい
で……」

ぶつぶつと電話の向こうの雨沢は納得がいかないようだが自分は
浮かれていた。

さあ、明日でこの茶番劇を終わらせるぞ！

「ふ～～ん。それで？」

朝一番に朝倉蒼一を捕まえ、人気の無い屋上に連れて来て

「自分はお前と付き合ひ」とはない。諦めてくれ

と頭を下げる自分にかけられた言葉が前述のそれであった。

「そ、それでとは・・・・・」

それでもこれでもなく断つたのだから潔く諦めてくれればいいのに朝倉蒼一の返事は自分の想像の範囲を超えていた。

「別に俺、お前がどう思つてこようが関係ないし?」

「なつー」

幾らなんでもそれは無いだろ?と猛然と顔を上げた自分に朝倉蒼一はさらに続けざまに言つ放つ。

「だつて俺のことを好きにさせんから」

「・・・・・・・・・・・・せつ?」

「いま、なんと?」

「今は俺のこと好きじゃないんだろ？そんなのは見てりゃわかる。だけどお前、好きになるよ。俺のこと」

俺が惚れさせると笑顔で言い放つ男の正気を本気で疑つ。

「誰が惚れるか！…」

「惚れる」

「惚れない！…」

「惚れるね。だって俺がお前に惚れているから」

「……………！」

そんなんの理由にならないと言ったかったのに「お前に惚れている」の言葉で想像以上に動搖してしまった自分は何も言い返せない。パクパクと口を開閉させるしかない自分の頬に朝倉蒼一が唇を寄せる。逃げようとした時には既に遅かった。
柔らかな感触が頬を風のように触れた。

「#\$ ¥!!」

声にならない叫び声を上げつつ自分は朝倉蒼一を押しのけると全速疾走でその場から逃げ出した。

茶番劇は終わらなかつた（泣）。それどころか手痛い反撃まで喰らってしまった！

当たり前の話だが同学年でクラスも一緒に同じ教室で同じ授業

を受けるわけで……。

「林さん」

「…? (脱兎)」

休憩時間の度に律儀に声を掛けてくる朝倉蒼一。

そしてその度に全力疾走で教室から逃げ出し授業開始まで逃げ回る自分。

そんな自分たちの姿を遠巻きに見ていく級友達。

「なにやつてんのあんた達は」

放課後、中庭の茂みに隠れていた自分を見つけると呆れたように雨沢が溜息をついた。

「ちやんと断つたんでしょう? そんな風に避ける方が相手にしつれ……ってはやって君? なんでそこで赤い顔で座り込んでんの? 何かあつた? ……」

「…………」

「なんで更に赤くなるの! 本当ににがあつたのよ」

自分は一体どうしてしまったのだろう。

おかしい何かがおかしい。

自分で狂ってきているのが分かる。

ぐぐぐと心臓が常にはないほど活発に動く。顔面に血が上がる。拳動は不審だしおまけに……。

— ! —

油断するとあいつの顔が浮ぶとはどんな奇病だ——頭を搔き毬りたい衝動を必死になつて堪える。泣きたい。逃げたい。誰かどうにかしてくれ。そんな軟弱な考えが頭に浮ぶのを止められない。

「うあ・・・はやて君がいまだかつてないほど可愛い」

可憐し！自分のどこをどこ見た？そんな感想か！

「だつて真っ赤な顔で蹲つておまけに少し涙目だし・・・意外だけはやて君つて小動物系の可愛さがあるわ」

なんだ！人が真剣に悩んでいるというのにその感想は！一言文句を言つてやろうと立ち上がった自分を背後から伸びてきた強い手が抱き寄せる。

「あら」

雨沢が目を丸くして自分の後ろに立つ人物に目をやる。
自分は反射的に振りほどこうとしたが易々と押さえ込まれてしま
う。

「やつと捕まえた

いま、一番聞きたくない声に身体から血の気が引く。振り向くのも怖い自分は俯いてそして呼んだ。

背後で奴が微かに笑つたのが気配で分かつた。

悪いんだけど席、外してもらえないかな？

外面モードの朝倉蒼一の言葉に雨沢は必死に懇願する自分を無視してあっさりと背中を向けた。

まで、行かないでくれ！

散々ごねたし暴れたのにそれら全て朝倉蒼一に阻止された。健闘むなしく自分は朝倉蒼一と一人きりにされてしまった。だらだらと冷や汗が流れれる。

「疾風」

「…………なんだ」

引きつった表情で振り向いた自分を一体誰が責められるだろうか。しかもこの男、未だに自分を離さない。

後ろから抱きしめられた状態のまま会話続行らしい。

朝倉蒼一は恐ろしく不機嫌な顔で自分を見ていた。

「なぜ、俺を避ける」

低い声が自分を責めるのを聞いて自分は何故だが無性に泣きたいような怒り出したいような気分にさせられる。

「お前、こそ・・・なぜなんだ」

「？」

訳がわからないといつ顔をした朝倉蒼一に自分の感情が爆発した。

「お前にや一体どうして私に付き纏つんだ……好きだからとかそんな理由で納得できない！私はどう考へてもお前に好かれる人間じゃないし女らしくもない！可愛くもない！どこをどう見ても好きになられる要素なんてないんだ！」

なんなんだ！お前のことがちっとも分からない！」

激昂の余り抱きしめられた手を振り払いそのまま相手の胸をどんどんと叩く。

「どうして……どうして私が好きだなんて言つんだ。どうして私を強いままでさせてくれないんだ！お前がいると私は……『自分』に戻れなくなる！」

長い髪の女の子らしい自分。甘ったれで泣き虫で誰かに迷惑をかけないと生きていられないような弱い自分をなぜ引きずり出すようなことばかりする…

頬を涙が伝う。

「私」は泣いている。強くなると決めたのに「自分」は強いのに弱い「私」が泣いている。

「私は……強くならないといけないのに…」

泣き喚いでどんどんと叩いていたのに朝倉蒼一はなにも言わない。されるがままだった。

「なんで……お前、私の前に現れたんだ」

「じうじて相手の胸に額を当てるわたしは田を囲む。

「じうじて私なんかを好きだと囁くの」

声が口調が心が戻る。
自分が消え私が現れる。

心が冷える。涙ももう流れない。

「じうじこなくなるへせに・・・」

耳の奥で閉じられた扉の音が聞こえた。
帰つてきたら皆でご飯を食べに行こうって約束した。
だけど、約束は果たせなかつた。
誰も帰つてこなかつた。

「じうじ、ずっとは居られないのー」

繰り返し繰り返し思い出す。お父さんとお母さんが出て行く。その背中が閉じられた扉にさえ切られる。次に扉が開いた時には一人の顔に白い布がかけてあつた。どんなに声を掛けても搖さぶつても答へは返つてこない。冷たい体。返つて来る静寂。

怖い。怖いの。私は・・・怖い。

「心を預けるのが、怖いのよ・・・」

喪つた時の衝撃を知つてしまつてこるから。

「もう、嫌なの。入つてこないで・・・」

胸が痛い。苦しい。どうしようもないぐらこの恐怖があった。
ずっとずっと胸に穴があった。

それを普段は無視していても不意に気が付く。
深く大きな穴の縁に私はずっと立っていた。

「怖いの・・・」

か細い声。「自分」だったら決して出さない声に嫌悪感が増す。

「疾風・・・」

一瞬なにが起きたのか理解できなかつた。

強く抱き寄せられたと思つたら唇を奪われていた。

「！・・・つ！」

押しのけようとしてもびくとも動かない。
怖い・・・。

先ほどとは違つ恐怖が「私」を襲う。

全てを奪われるような全てを明け渡せと言われていくような抱き
しめられた腕の強さ。触れあつた唇の感触。感じる体温。全てが恐
怖だつたのにどうしてだろう恐怖とは違つ感情もある。

怖いのに本当に怖いのにどうして手は彼を掴んでいるんだろう。
突然の口付けはあるで実感が湧かない。だけど不思議と嫌悪感は
ない。ぼんやりとした頭でそんなことを考えた。

「好きだ」

口付けの合間に何度も囁かれた。その言葉に涙が出たくなる。

「甘えればいい。俺に甘える。喪うのが怖いなら手放すな。俺は決してお前の前から消えない」

大きな手が私の頬を撫でた。

「一度と離れたりなんてしない。よつやく見つけたんだ」

優しい瞳がとても近くで愛しそうに私をしていた。

「だから俺を選べ」

自信満々な自分が断ることなんて微塵も疑っていない強い声。多分、逃げられない。捕まつたのだと本能的に悟った。

彼の顔が再び近寄る。

私は答えの代わりに彼の口付けを受け入れた。

涙が一粒頬を流れ落ちていった。

『一年一組の住田くん。至急職員室まで来てください。繰り返します・・・』

「!?」

前触れもなく流れた放送に私・・・いや「自分」は正気に返った。今、まさに口付けをしていた相手と真正面から顔をあわせ、それから自分たちがしていた行為の意味に気がつき羞恥心で顔が真っ赤になつた。

そんな自分に朝倉蒼一が怪訝そうな顔で覗き込んでくる。

そうすると自分たちの距離は必然的に先ほどの行為を思い返させ

るものになるわけで……。

「…………はやて？」

「ひや！」

全然自分らしくない声を上げてしまう。

顔中から火が出るとはまさに「」のようなことを言うんだ。

今死んでも可笑しくないくらいに心臓がバケバケしている。

- 10 -

107

卷之三

ああ、まだ動搖している。「私」が抜けきれていない。
だけど朝倉蒼一は少し驚いた顔をしてからにやりと性質の悪い笑
みを浮かべた。

「へえ……離して欲しい？」

当たり前だ。何を言つんだこの男は・・・!

「だつたら・・・・・」

えらい嬉しそうな顔で何を要求しそうとこのひの男は…

「蒼一」

「まあ？」

「蒼一と呼んでくれないか？」

「何故…」

「…………呼ばないのならもう一度するが」

何をと問うまでもない。ぱっと口を押されると自分は悔しからず羞恥で俯いた。

「疾風？」

「やせと笑う朝倉蒼一の顔が自分を見ているのが分かった。

「そ…………ち…………」

「聞こえない」

「へつーへつ…………い……」

「疾風…………そんなにされたいの？」

まあ、俺は嬉しいけどなどとふさげたことをせりあながらべりと顎を掴まれ上を向かされた。

「蒼一！」

言つた途端、自分は再び俯く破目になつた。・・・なんで、なんでそんな・・・嬉しそうな幸せそうな顔をする！

たかが下の名前を呼んだぐらいで！

日本男児ならもうとしゃきっととしりとぶつぶつと照れ隠して亥い
ている自分のつむじに口付けを落とすと朝倉蒼一 あさくら ひでと自分を
抱き締める。

な、
何！

「貴様！約束が違うぞ！」

「いいんだよ！俺がお前を抱き締めたいんだから」

珍しくはしゃいだ声でそう言つと朝倉蒼一は軽々と自分を抱き上げる。

「...」

思わず首に抱きついた自分を抱えたまま朝倉蒼一は楽しげに笑つた。

「疾風！だいすきだ！」

「……………つ！大声でそんなことを言うな！」

うつけ者！は、
はしたない！」

自分の名前は林
疾風。

双子の兄 葉月と間違つてだされた名前と女子平均身長を大きく上回る身長と男のような言動でよく男に間違われる。

自分は恋などしないと思つていた。

両親を亡くしたあの日からずつと大切なものが増えるのが怖かつた。

喪えないものを喪つた時の喪失感、その時空いた穴はまだ塞がつてないから恋など出来ない。

だけど・・・・・。

「蒼ー！」

「ん？」

もし、恋するならば・・・・・。

「『わたし』は手にわいぞー！ そう簡単にお前のものになるとは思わないことだー！」

それはお前かもしけないと少しだけ・・・ほんの少しだけ思つたりもするんだ・・・・付け上がるから絶対に朝倉蒼一には言わないがな。

自分たちがどんな関係に落ち着くかなんてわからないけど・・・。きっとこれが自分たちの本当の始まり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6636u/>

恋をするなら

2011年7月7日02時39分発行